

# 編集委員

# 猫との共生 地域ぐるみで

## インタビュー

NPO法人「神戸猫ネット」理事長 杉野 千恵子さん(70)に聞く

### 野良猫に不妊手術。目指す街の姿は？

野良猫が地域内でこれ以上増えないようにする「地域猫活動」の動きが広がっている。身勝手に飼いを捨てる飼い主が後を絶たない中、野良猫が引き起す子猫問題の解決策を探る。神戸市内で取り組むのは、NPO法人「神戸猫ネット」だ。人と猫の共生を目指し、活動を通して小さな命の大切さを訴える。行政や獣医師会なども連携を深める猫ネットの杉野千恵子理事長(70)に、具体的な取り組みを聞いた。(吉村勇人)

「猫ブーム」がいわゆる一方、野良猫が地域にとつて問題になっていきます。

「猫は繁殖能力が高く、年に数回、数匹ずつ出産していくので、放っておくとねずみ算式に増えてしまいます。鳴き声や、ふん尿のおいにお困っているのでは、『迷惑な猫は殺処分してしまえばいい』という意見が出てくる。一方で野良猫をかわいそうだと思っただけか、かわいがる人もいる。そして、餌やりをする人と、猫嫌いの人の間でトラブルが起きてしまう。一方策として、提唱しているのが「地域猫活動」です。

「捕獲器を使って野良猫を捕獲し、不妊・去勢手術を施し、元いた場所に戻す。この一連の工程を『TNR』と呼んでいる。子猫がこれ以上増えないようにし、手術を受けた猫は、地域で世話をして、その命を全うさせてあげよう、という考えです。餌やりも含めて野良猫を管理することで、地域の癒やしやの場にもなりうる。環境省も殺処分を減らす方針を打ち出しており、今のところ考えうる最善の策だと思っている」

「手術というところ」が「かわいそう」

すぎの・ちえこ 1948年、神戸市出身、市立植生園。2010年に神戸猫ネットを設立し、理事長に就任する。同市兵庫区在住。保護した猫を飼って飼っている。

「という人もいますのよ？」

「野良猫が産んだ子猫はガラスに攻撃されたり、車にはねられたりして、成長すると厄が難しい面がある。その意味で不幸な命を増やすところのほうがかわいそうだと思う。野良猫は飼いが捨てられて繁殖したもので、人間が責任を持つべきじゃない」

「住居同士が理解し合えるか、が大事な点だと思います。例えば、夜中にこもり餌をやる人がいる。猫嫌いの人に注意されるから、餌を隠したか逃げたようにその場を離れる。すると残期待している」

「TNRを実施する際には、住民に活動のお知らせを配布する。捕獲する場面も見てもらうことで、地域の猫がオープンな存在になる。手術を行った猫の耳にはV字のカットを入れて、手術済みだと分かるようにする。地域猫として管理されていることが周知される。近隣の環境が改善することを」

「TNRを完了する際には、住」



神戸市須磨区飛松町2 (撮影・後藤亮平)

## 適正管理、人間に責任

「神戸猫ネット」は2010年に発足した。

「個別に活動していたボランティアが、課題を共有する必要性を感じた。13年に法人化し、神戸市内全域を対象に活動している。行政との連携が必須だと感じ、働きかけた結果、神戸市では昨年、『人と猫との共生に関する条例』が施行された。獣医師会などが参加する協議会が発足し、TNRなどに取り組んでいる」

「活動が進めば、そのうち野良猫はゼロになるはずですが、」

「捨て猫が減らない。TNRの効果は実感しており、100匹以上いたのが5匹まで減った地域もある。ただ、次々と猫が捨てられるから、いちごっこになっている。飼う人にはその命が尽きるまで、責任を持つべきじゃない」

「手術した猫のうち、虐待の恐れながらもあって地域に戻せない猫を、新しい飼い主に引き合わせる譲渡会も開いている。ペットショップで買う以外にも、猫を飼う方法があることを知ってもらう意味を込めている。一部のペット業者はモノを工場生産するようだが、無理な繁殖をさせていると聞かす。フリーターの質をもっと向上させなければならぬ。買った側も店頭で『かわいそう』と思うだけで、売れ残ったらどうなるのか、どんな環境で生まれたのか、と想像を巡らせてほしい。迎えるペットは家族で、大切な命なのだから」

### 記者のひとこと

「動物全般が好きだけれど、好きなだけでは、活動は続けられない」と杉野さん。行政も動かし、ネットワークを広げてきた。動物愛護の側面だけでなく社会問題として取り組む姿勢が、広く知れ渡ればと思う。